心ゆたかに

三芳町立藤久保中学校　学校だより　第２号
学校教育目標　「自ら考え進んで行動する生徒」
令和７年５月 15 日（木）発行　文責　菅谷　和孝

新 HP

「勝負に拘る」

校長　菅谷和孝

本日・明日の中間テストが終わりますと、翌週には体育祭、翌月には学校総合体育大会が始まります。また、吹奏楽部もコンクールが夏に控え、それぞれが目標に向かって最後の仕上げをしていく時期になってきます。このような行事や競技会等において共通して言えること、それは「そこには必ず勝負があり、優勝するチーム（選手）は1チーム（人）しか生まれないということ」です。ごく例外的に水泳や陸上といった記録で勝敗を決める場合、同タイムが生じた時は同校（者）優勝として扱うことがありますが、ほとんどは1チーム（人）しか頂点に立てません。つまり、最後まで勝って終われるのは1チーム（人）しかいなく、ほとんどは負けて終わってしまいます。当たり前ですが、勝てば嬉しいですし、負ければ悔しいです。しかし、どのような方法を使っても、ルールの範囲内であれば何をしてもよいのでしょうか。俗にいう ‘勝利至上主義’ でよいのでしょうか。結果として ‘勝てば官軍負ければ賊軍’ というようなことなのでしょうか。

私としては勝ち負けの拘りではなく ‘勝負に拘ってほしい’ という思いがあります。一見同じようなことを言っているようでありますが、そうではなく、「勝負に拘る」とは、目標や目的に対して意思や意図をもって計画や作戦を練ったり、自分や仲間たちを信じてチャレンジしたりしながら、様々な手段を講じながら最後まで諦めないということだと思います。勝負には「相手との勝負」「過去や現在、未来の自分との勝負」「瞬間での勝負」「長期的な勝負」「組織的な勝負」など状況は様々です。このような場面において、「拘りをもって臨んだのか」と「ただ単に対応したのか」では、結果が出た後の感じ方や成長は全く違います。よく「練習はうそをつかない」と言いますが、いくら練習しても、いくら努力しても、相手がいての戦いなので、想定通りにならないことの方が多く、うそをつかれたかのように感じる結果となることもあるでしょう。さらに、このような練習自体も、球技等の得点競技の練習の場合、本番で使うかどうかも分からない練習を何十回、何百回と行ったり、水泳や陸上などの記録を求める競技では、数秒・数十秒・数分で終わってしまうのに対し、練習はその競技時間の何百倍・何千倍・何万倍もの時間を費やしたりしてきています。これだけのことを準備（練習）してきたのですから、やはり自分のプレー（行動や発言）には「勝負に拘ってほしい」と思います。

以前、学校朝礼で生徒たちに、「負けているとき、怒られたとき、うまくいかないとき、ミスをしたときなど、笑顔を作りづらいときこそ、人の本性が現れる。人は完璧ではないので、このような状況に陥ったときこそ、笑顔で前向きに周囲と協力しながら楽しんでほしい。」という内容のお話をしました。何も考えないで、ただ笑っているだけでは良くありませんが、現状をポジティブに捉え、思い切り楽しむこと、前向きな言葉を発することによって、周囲にそれが伝わり、応援したり感動を与えたりするようなプレーが生まれると思っています。体育祭ではもちろん運動が得意な生徒もいれば苦手な生徒もいます。運動では貢献できないけど、作戦を考えたり、応援を頑張ったり、応援ボードを作成したりすることで貢献してくれる生徒も多くいます。1年生から3年生全員が形や大きさは違いますが、団には誰一人欠かせないピースをもっています。練習時間を含め、勝負に拘りきるための柔軟性を養い、各々が各々の場面でピースをはめ込みながらパワーを増幅させ、当日には唯一無二の団というチームが完成することを願っています。

「勝負に拘る」＝「柔軟性」＋「協働」＋「信念」＋「思いやり」＋「思考力」＋「判断力」＋「想像・創造力」
（「決断力」「実行力」などまだまだたくさんありますが・・・）

そしてこれらは勉強、3年生にとっては受検（験）にも言えることです。自分で決めた道を胸張って歩んでいくために、そして夢や目標を現実にするために、一つ一つの時間や出会いを大切にして、拘り（意思や意図）をもって活動してほしいと願っています。